

同人グッズを作れるようにする。それらには書店が発行するISBNコード(シール)を付与して、利用客は手売りする冊数は持ち帰るが、それとは別の冊数を専用書棚に配架する。

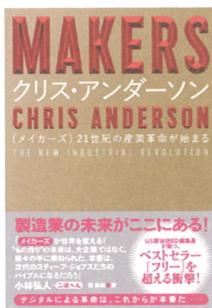
最近人気のシェア型書店の発展形で産地直売のファクトリー書店の誕生だ。

書店版元のISBNコードがあれば、取次に戻る返本輸送トラックに載せて倉庫経由で他の書店に再送本ができる。各地のファクトリー書店は小さな版元(マイクロパブリッシャー)として書籍流通では認識され、顧客が支払った製造コスト・著作コストで成立した商品へコード貸しすることでリスクなく版元利益を得る。

同人誌・グッズの個人通販時に売主・買主が負担する郵送費に比べて、日本の取次が組み上げた書籍の送本・返本

コストはかなり安い。

クリス・アンダーソンが著書『メイカーズ 21世紀の産業革命が始まる』(NHK出版/2012年)で予見したITとイノベーションツールによる産業革命は見事な予言書だったが、もしクリスが日本



▲書籍『メイカーズ』

の書籍の再販売許可制度と返本という世界で一例だけの特殊な流通システムを知っているれば、間違いなく日本版には「書店が出版社になる日」という章を加えたと思う。

必要
表現と品質の保証者が

この新考案での最大の問題は内容の監査と校閲である。

表現内容に差別表現や誤謬誤認がないかを既存の版元は編集者、監修者(査読者)、校正校閲者を入れることで点検している。

ならば書店ISBNを希望する顧客(創作者)向けに、内容品質を担保するオンラインチェックを請け負う査読校閲評価システムを作ろう。

マイクロパブリッシャーにならんとする同人作家や支援書店は予め評価システムに査読校閲を依頼し、その承認番号をISBNと連結させよう。

その適合番号がなければ、ファクトリー書店も取次も流通と販売を請け負わない。検閲機関ではなく適合評価システムとして、あるいはさらに売れるための改良やマーケティング提供サービスとして、従来の版元が機能すればいい。

欧米とは違う独自の流通システムと創造的顧客を有する日本の書店には、まだまだやれることがあると思う。

